

京都天文史跡めぐり[1]

～連載をはじめるとあって～

有本 淳一（京都市立塔南高等学校）

1200年の都、京都。この都市には、いまさら私が書き上げるには、はばかられるほどの歴史があり、多くの名所・旧跡や文物が残されています。また、過去において、天文は国家の中枢を成すものであり、権力とあるいは宗教と結びついていました。その結果、京都に残る歴史的なものの中には天文に関係するものも数多くあります。しかし、明治時代より前の歴史的な天文学は、現在、私たちがすぐに思い浮かべるものとは大きく異なっていました。いま、天文学というと宇宙の誕生や、星の一生、あるいはブラックホールについてといった宇宙の姿を解き明かす学問ですが、江戸時代までは暦を作ることを目的としたものだったからです。ですから普通に京都の都市を歩いていても、名所・旧跡を訪れても、それが"天文史跡"かどうかはわかりにくいことが多いのです。この連載では昔の暦算天文学や、陰陽道、あるいは古の都人たちがどのような想いで星空を眺めたのかを紹介しながら、京都に残されている天文史跡をめぐってみようと思います。それぞれの連載は私の思いつくまま、気の向くままに進めていきますので、連載回による時代の前後や話題の飛躍があると思いますが、そのあたりはご了承ください。

ではみなさん、突然ですが、みなさんは満天の星空を見たときにどのような感情をお持ちになりますか？ほとんどの人は「きれいだなあ」とか「ロマンチックだなあ」と感じられるのではないのでしょうか。むしろそのように感じない方を探すほうが難しいかもしれません。しかし、古からほとんどの日本人がこのような感情を持っていたわけではなかったのです。昔から日本人の美意識として、花鳥風月や雪月花といったものが取り上げられ、月は多くの和歌にも詠まれてきました。しかし、それに引きかえ星空は見ることすら忌み嫌われていた時代があったのです。本格的な内容に入る次回はこのような都人たちの星空に対する想いから紐解いていきたいと思っています。ではご期待ください。